

## ゲルク派による経量部学説理解（１）二諦説

著者	吉水 千鶴子
雑誌名	成田山仏教研究所紀要
号	21
ページ	51-76
発行年	1998-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/103847">http://hdl.handle.net/2241/103847</a>

# ゲルク派による経量部学説理解（１）二諦説

吉 水 千鶴子

- I 序論  
 II チャンキャ・ロールペイドルジェ著『学説設定明説』経量部章より  
 「二諦についての主張の仕方」(73a3-74a3; Klein 1991: 123-127)  
 内容詳説・注記  
 附録 経量部章科文 (Sa bcad)

## I 序論

本稿は、チャンキャ・ロールペイドルジェ (lCang skya Rol pa'i rdo rje, 1717-1786) 著『学説設定明説』(Grub pa'i mtha' rnam par bzhag pa gsal bar bshad pa) 経量部 (mdo sde pa, Sautrāntika) 章の内容の分析を通し、そこに現われるダルマキールティ (Dharmakīrti, 7c.) の認識論・論理学に対するゲルク派独自の理解を確認するものである。この経量部章については、既にクライン (Anne C. Klein) による英訳 (Klein 1991) によってその内容は広く紹介されているが、引用文献の同定、先行文献との内容的に関連などについての情報に不備があり、それを資料的に補うことも本稿の目的の一つである。実際、チャンキャの学説の大部分は、ダルマキールティの体系を解説するゲルク派の先行文献の中に既に説かれており、またダルマキールティの認識論・論理学については経量部の立場から説かれているとチベットでも認められているので、チャンキャのそれを「ゲルク派の経量部学説理解」と呼ぶことは不適切ではない。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> チャンキャ自身も述べるように、経量部の学説を明確な主題として論じる論書は存在せず、その主張は AK, AKBh, AS, ディグナーガ、ダルマキールティの著作、TS, TSP などから集められている (lCang skya Grub miha' 72b3-73a2; Klein 1991: 122)。それは主に AK, AKBh を基本として有部とも共通の思想を持つ「聖典に従う経量部」(lung gi rjes 'brang gi mdo sde pa) と、ダルマキールティの論理に

近年、ゲルク派によるこの仏教論理学・認識論の理解の特異性が、ダルマキールティ自身の思想と注釈書類に提示されたその伝統的な解釈、あるいはそれに沿ったサキヤ派の解釈との比較によって、除々に明らかにされつつある。<sup>2</sup> 例えば、言葉に基づく認識・思考の対象を現実の現象的存在とは切り離れたディグナーガ (Dignāga, 5～6c.), ダルマキールティに対して、ゲルク派はその思想を解釈しながらも、言葉の対象である普遍 (sāmānya, spyi) が直接知覚 (pratyakṣa, mngon sum) のみの対象である個物 (svakakṣaṇa, rang mtshan) に随伴して実在することを認め、リアリズム (realism) 的傾向を顕著にする。もちろんこうした方向転換は既にインドにおいて芽生え、ゲルク派以前のチベットで行なわれたと考えられるが、その点に関しては我々はまだ十分な資料を持たない。チャンキヤの『学説設定明説』は、その意味では最も新しい資料の一つであるが、ツォンカパ・ロサンタクペイペル (Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419) とその弟子であるギャルツァプ・ダルマリリンチュエン (rGyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1432) とケードゥブ・ゲーレクペルサンポ (mKhas grub dGe legs dpal bzang po, 1385-1438) の学説を基本としており、ゲルク派内での正統的な思想をまとめたものとして参照価値がある。但し、こうした初期ゲルク派の著作の中ですら、その特異な解釈がダルマキールティ自身のどの議論に関するものなのか、明確に言及されていることが少ないため、その形成過程は推測される以外にない。筆者は、彼らの普遍実在論が『プラマーナヴァールッティカ』(Pramāṇavārttika, 以下 PV) 第一章のアポーハ (apoha) 論に関する議論、とくに68-91偈及びその自注 (PVSV) の一つの解釈として形成されたのではないかと推察している。既に幾つかの根拠を示し、議論してきたが、<sup>3</sup> 今回ここにチャンキヤの『学説設定明説』より経量部の「二諦についての主張の仕方」の前半部分

従う「論理に従う経量部」(rigs pa'i rjes 'brang gi mdo sde pa) に分類される (内容詳説注記4, 7) 参照)。ここで経量部と呼ばれるものはそのようなものであり、実際のインドの歴史上の「経量部」の実像について考察材料を与えてくれるものではない。経量部ないしその祖と言われる譬喩師 (Dārṣṭāntika) については、御牧1988: 229, 加藤1989: 68-92など参照。

<sup>2</sup> 例えば, Dreyfus 1992, 1994: Introduction, 1997, Tillemans 1995, Yoshimizu 1997, (forthcoming) 参照。

<sup>3</sup> Yoshimizu 1997: 1112 n. 37 及び Yoshimizu (forthcoming) 参照。

の内容を解説するに際して、ゲルク派の二諦説そのものがPVの同じ部分を根拠として立てられているのではないかと思われるので、その問題を序論として提示しておきたい。

ダルマキールティの二諦説と言えば、誰もがまずPV III 3を思い浮かべよう。

arthakriyāsamartham yat tad atra paramārthasat |

anyat samvṛtisat proktaṃ te svasāmānyalakṣaṇe || 「＝ここで効果的作用の能力のあるものが勝義の存在であり、他は世俗の存在と言われる。それらは（それぞれ）個物、普遍である。」<sup>4</sup>

チャンキャも「論理に従う経量部」はこの偈の説くところに従って二諦を主張すると述べている。しかしながら、ゲルク派にとってこの偈は二諦の定議 (mtshan nyid, lakṣaṇa) を立てるものではなく、二諦の実例、すなわち定議が該当する具体的なもの (mtshan gzhi, lakṣya) を述べたものである。<sup>5</sup> そして定義は別に次のように与えられる。

勝義諦：「語と分別知によって想定されたものに依存せずにそれ自体の本性の側から論理による考察に耐えるものとして成立しているもの」 (sgra dang rtog pas btags pa la ma ltos par rang gi sdod lugs kyi ngos nas rigs pas dpyad bzod du grub pa)

世俗諦：「それ自体ではない作意などの語と分別知によって設定されただけのものとして成立しているもの、あるいはそれ自体ではない語と分別知（の働き）があるだけでそれ自体が認識されうるもの」 (rang las gzhan pa'i yid byed sogs sgra dang rtog pas bzhag pa tsam du grub pa'am | rang las gzhan pa'i sgra dang rtog pa yod pa tsam gyis rang nyid gzhal nus pa)

この定義は、既にツォンカパ師弟の認めるところである。<sup>6</sup> この一見すると中観派的な表現を含む定義は、ダルマキールティ自身の言明に基づくものなのか。この点について、ダルマリンチェンによるツォンカパの講義録とされる『確実な認識についての備忘録』 (Tshad ma'i brjed byang) に二

<sup>4</sup> 内容詳説注記8) 参照。Cf. PV I 166ab: sa pāramārthiko bhāvo ya evārthakriyākṣamāh |

<sup>5</sup> mtshan gzhi については内容詳説注記13) 参照。

<sup>6</sup> 内容詳説注記11) 参照。

諦の定義の根拠となる二諦の語義を解説する際、PV I 68cd-69a が典拠として引用されることが注目される。<sup>7</sup> この二偈は次のような内容である。

pararūpaṃ svarūpeṇa yayā saṃvriyate dhiyā |  
 ekārthapratibhasinyā bhāvaṃ aśritya bhedināḥ ||  
 tayā saṃvṛtanānāṛthāḥ saṃvṛtyā bhedināḥ svayam ||  
 abhedina ivābhanti bhāvā rūpeṇa kenacit || 「＝単一の対象 [=普遍]  
 の顕現をもつ知が、別々の諸存在 [=諸々の個物] に依存して、自らの  
 形象によって他の形象を覆い隠す（とき）、それ自体としては別々  
 なる諸存在は、かの覆い隠す（知）によって多数の対象であることが  
 覆い隠されて、何らかの [単一の] 形象として別々でないかのごとく  
 に顕現する。」

ゲルク派の説く世俗の語義「個物を実際に把握対象とすることを覆い隠す知（＝分別知）の側で真実なもの」がこの PV I 68-69に基づいていると考えることに問題はない。それはダルマリンチエンとケードゥプのこの偈の注釈にもはっきりと述べられているからである。<sup>8</sup> またこの語義が中観

<sup>7</sup> 内容詳説注記18) 参照, Yoshimizu 1997: 1110 n. 35 参照。

<sup>8</sup> *Thar lam gsal byed* 56b5-57a2: (kun rdzob bden pa'i kun rdzob gyi sgra bshad) shing ma yin las tha dad pa'i shing gsal gyi dngos po rnams la brten nas shing gsal gyi don rnams rigs geig tu snang ba'i shing gi spyi 'dzin gyi blo chos can | de kho na nyid mthong ba la sgrib par byed pa'i blo kun rdzob pa yin te | rang gi ngo bo shing ma yin las log par snang ba'i sgra don gzung yul du byas pa yis shing gsal gzhan gyi thun mong ma yin pa'i ngo bo gzung yul du byas nas mthong pa la sgrib par byed pa'i blo yin pa'i phyir | shing gsal rnams rdzas tha dad kyang spyi blo la rigs tha dad min pa lta bur snang ba la rgyu mtshan yod de | blo des rdzas tha dad pa nyid gzung yul du mthong ba la sgrib shing shing gsal gyi dngos po rnams rang ma yin las log par rang rgyu las skyes pa'i ngo bo 'ga' zhig gis de ltar snang ba'i phyir | 「＝(世俗諦の世俗の語義) 木ではないものから別異である個々の木 (=vyakti) である諸物に依存して、個々の木である諸対象が同類のものとして顕現する木という普遍を把握する知が主題である。(それは) 真実を見ることを覆い隠す世俗の知である。自らの形象である、木ではないものとは反対のものとして顕現している語の意味 (śabdārtha) を把握対象としていることによって、他とは共通ではない個々の木の (それぞれの) 形象を握把対象として見ることを覆い隠す知であるからである。諸々の個々の木は実体として別異であるが、(その) 普遍が知に別異ではない種類のごとくに顕現することには原因がある。即ち、この知によって別異なる実体そのものを把握対象として見る事が覆い隠され、個々の木である諸物がそれ自身

派の見解と共通することも彼らによって指摘されている。<sup>9</sup> そして次の偈 (PV I 70) を見よう。

tasya abhiprayavaśāt sāmānyam sat prakīrtitam |  
tad asat paramārthena yathā saṃkalpitam taya || 「=その[知の] 思  
念の力によって普遍は存在すると語られているが、その[知] によっ  
て想定されたとおりには、勝義としてはそれは存在しない。」

ここでは「勝義として」という限定語によって「普遍」が世俗としてのみ存在することが示唆されているが、それは「[分別知の] 思念の力によって」「想定されたもの」である。チベット訳では, bsam pa'i dbang gis, kun rtags pa (Miyasaka 1971/72: 125) と言う。これらの表現に、「語とではないものとは反対のものとして自らの原因から生じた何らかの性質によってそのように(共通なものとして) 顕現するからである。」; *ibid.* 57a4f.: … gsal ba rang mtshan rnams ni bsam ngo'i bden pa tsam ma yin te | rang gi gnas tshod bden par gnas pas so || gzhung 'di dag ni kun rdzob dang bden pa'i sgra bshad 'jug ston pa yin la | 「=… 個々の諸々の個物は思念の側で真実であるのみではなく、それ自身のあり方の限り真実として存在するからである。これらの論 [=PV I 68-69] は世俗と諦という語義の適用を説いたのであって」; *Rigs pa'i rgya mtsho* 86a2 ad PV I 68-69: de lta bu'i spyi 'dzin gyi blo de ni kun rdzob ces pa'i sgra bshad pa'i gzhi la blo kun rdzob pa de'i ngor\* bden pa'i phyir | kun rdzob bden pa zhes bya'o || (\*corrected: ngo bo) 「そのような普遍を把握するこの知が、世俗という語義が基づくものであり、この世俗の知の側で真実であるから、世俗諦と言われるのである。」

内容詳説注記18) を合わせて参照のこと。

<sup>9</sup> *Thar lam gsal byed* 57a5f.: gzhung gzhan du | gti mug rang bzhin sgrib phyir kun rdzob ste | zhes dang | yang gzhan du | gang zhig gis sam gang zhig la || yang dag sgrib byed kun rdzob 'dod || ces gsung pa ltar ro || 「=別の論書に『愚痴は自性を覆い隠すがゆえに世俗である』といい、さらにまた別の[論書]に『あるものによってあるいはあるものに対して真実を覆い隠すものが世俗と認められる』とお説きになっているとおりである。」(*Rigs pa'i rgyan* 206b6にも同文の引用がある。) ; *Rigs pa'i rgya mtsho* 86a2f.: dper na | dhu ma pa'i gzhung lugs dag las | gti mug rang bzhin sgrib phyir kun rdzob ste | zhes pa dang | gang zhig gis bsam gang zhig la | yang dag sgrib byed de kun rdzob | ces bshad pa dang 'dra'o || 「=例えば、中観派の諸論書に『愚痴は自性を覆い隠すがゆえに世俗である』といい、『あるものによってある思念において真実を覆い隠すのが世俗』と説かれているのと同じである。」それぞれが共に引く二つの引用文のうち最初のものは, MA VI 28a (=BCAP 171, 6-9: mohañ svabhāvavaraṇād dhi samvṛtiḥ) である。同様の語義解釈は Pr 492, 10にも見られる。第二の引用文については、最初の句のテキストが一致せず、今のところ典拠不明である。

分別知によって設定されただけのものとして成立しているもの」というチャンキヤの世俗諦の定義の原型を見ることは可能であろう。そして勝義諦は当然これとは反対の特質のものとなるのであるが、「論理による考察に耐えるもの」という定義づけも必ずしも中観派のみのものではない。<sup>10</sup> ダルマキールティは、上記の偈の自注の中で、普遍を存在すると考える「世間の言語習慣に従う人々」(vyavahartāraḥ, PVSV 39, 6)に「[真実をあるがままに]説明する人々」(vyakhyatāraḥ, PVSV 39, 5),「真実を考察する人々」(tattvacintakāḥ, PVSV 39, 10)を対峙させる。さらにこの一連の普遍に関する議論のまとめの偈に含まれる85-86偈は次のように述べる。

dharmadharmivyavasthānam bhedo 'bhedaś ca yādṛśaḥ |  
 asamikṣitatattvārtho yathā loke pratiyate ||  
 taṃ tathaiva samāśritya sādhyasādhanasamsthitiḥ |  
 paramārthavātārāya vidvadbhir avakalpyate || 「=属性と基体の定立

<sup>10</sup> 後に中観自立論証派と言われるジュニャーナガルバ (Jñānagarbha, 8c.), シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita, 8c.) は世俗を次のように規定する。SDV 21 (Eckel 1987: 175, tr. 89): ji ltar snang bzhin ngo bo'i phyir || 'di la dpyad pa mi 'jug go || rnam par dpyod pa byed na don || gzhan du song bas gnod par 'gyur || 「=(世俗は) 顕現するとおりを本質とするから、これについて考察はできないのである。もし考察するならば、それは何か別の(顕現のとおりでない)ものとなってしまいうから、[顕現のとおりを] 損なうであろう。」: MAIV ad MA164 (D70b7f., 一郷 1985: 162, 松本 1984: 144): kun rdzob ni sgra'i tha snyad tsam gyi \* bdag nyid ma yin gyi | mthong ba dang 'dod pa'i dngos po rten cing 'brel bar 'byung ba rnams ni brtag mi bzod pas yang dag pa'i kun rdzob ste | (\*gyis D) 「=世俗とは語による表現だけを本質とするのではない。知覚され、求められるところの縁起生の諸々の事物は、考察に耐えられないので[勝義ではなく]正しい世俗なのである。」しかしながら、類似の世俗の定義はダルマキールティの仏教論理学の継承者たちによっても採用されていることが、久間 1995: (50) ff. に指摘されている。Cf. e.g. PVBh 185, 26f. (ad PV III 4cd): avicārita ramaṇīyā lokaprattis... 「=世間の認識とは、考察されなければ喜ばしいものである…。」: JN 6, 8f.: avicāritaramyā hi pratitiḥ samvrtiḥ. 「=何となれば、世俗とは考察されなければ喜ばしい認識であるから。」また、既にチャンドラキールティ (Candrakīrti, 7c.) においても、真実についての考察 (tattvacicāra) は世間においてはなされないことが論じられている (江島 1980: 168-173 参照)。7-11世紀にかけてのインド仏教が二諦説に関して「真実の考察」という視点を通じてこのような統一的な見解を示していたとすれば、それがチベットに見られることはむしろ当然である。

は、世間では別異であるとか非別異であるとか、どのようであれ真実の対象を考察せずに理解されている。まったく同様に、それ〔＝属性と基体の区別〕に依存して、賢者たちは、勝義に入るために、論証されるものと論証するものの成立を適切なものとする。」

「勝義に入るために」とは「無常」などの真実を理解するためであり、そのために賢者たち、即ち真実を考察する人々は推論（*anumāna*）を立てるのである。こうした推論による考察がチャンキヤの言う「論理による考察」であろう。それに耐える真実が「無常」等の勝義なのである。このように、ゲルク派の二諦の定義は、ダルマキールティ自身の言明に基づいていると見ることは決して不可能ではない。

ところで、チャンキヤの「二諦についての主張の仕方」の議論は、構成、内容ともに *Tshad ma'i brjed byang* の「二諦の設定の確認」（*bden pa gnyis kyi rnam bzhag gtan la phab pa*, 16a6-47a5）という節に倣っている。そこでは三つの主題が議論される。即ち、１）「疑問の所在を確定すること」（*'dogs pa'i gnas 'god pa*）、２）「その（疑問に対する）答えを詳しく説明すること」（*de'i len rgyas par bshad pa*）、３）「実際の二諦の設定」（*bden gnyis kyi rnam gzhag dngos*）である。１）、２）は「普遍等は分別知によって想定されていることによって遍充される」という、いわゆるアポーハ論についての誤解と、それを否定するための論で、ここに普遍実在論が述べられる。<sup>11</sup>そして、３）において二諦の定義、語義などが示されるのである。チャンキヤの場合、まず最初に今回我々が内容詳説で取り上げた箇所（73a3-74a4）において二諦の設定を述べ、その後にかなり長い付論のような形で、アポーハ論への誤解と普遍、語の意味（*sabdartha*, *sgra don*）の問題を論じる（74a4-79a1）。順序は逆であるが、構成、内容は同じで、文章が一致するところも少なくない。それではいったいなぜ彼らは二諦説の解説の中に、長々とアポーハ論の問題及び彼ら独自の普遍実在論の議論を挿入したのか。答えは、おそらくこの論全体が、PV 140-185のアポーハ論の議論、とくに 68-91とその自注に基づいて立てられているからである。つまり、既に筆者が推測したように、彼らの普遍実在論はPVのこの箇所の解釈として発展したものであり、かつここで上に述べたよう

<sup>11</sup> Tillemans 1995, Yoshimizu 1997, (forthcoming) 参照。



に、二諦説そのものも同じ箇所に基づいているならば、それらが共に説かれることにも不思議はないのである。

## Ⅱ チャンキャ・ロルペイドルジェ著『学説設定明説』経量部章より「二諦についての主張の仕方」(73a -74a4; Klein 1991: 123-127)<sup>1)</sup> 内容 詳説・注記<sup>2)</sup>

32111<sup>3)</sup> 二諦についての主張の仕方 (bden pa gnyis kyi 'dod tshul)

73a3-4 1. 聖典に従う経量部 (lung gi rjes 'brang gi mdo sde pa)<sup>4)</sup>  
は毘婆沙師 (Bye smra ba, Vaibhāṣika) と同じく,<sup>5)</sup> AK VI  
4 の説<sup>6)</sup>の通りに二諦を主張する

73a4-74a3 2. 論理に従う経量部 (rigs pa'i rjes 'brang gi mdo sde  
pa)<sup>7)</sup>は, PV III 3 の説<sup>8)</sup>の通りに二諦を主張する

73a5-73b1 1) 「勝義諦」, 「世俗諦」の同義語<sup>9)</sup>

73a5 [1] 「勝義諦」(don dam bden pa, paramārthasatya)  
の同義語: 「実在物」(dngos po, vastu/bhava), 「個  
物」(rang mtshan, svalakṣaṇa), 「効果的作用の能力  
のあるもの」(don byed nus pa, arthakriyāśakti/  
arthakriyāsāmarthya)

73a5-73b1 [2] 「世俗諦」(kun rdzob bden pa, saṃvṛtisatya) の  
同義語: 「実在しない法」(dngos med kyi chos), 「普  
遍相」(spyi mtshan, sāmānyalakṣaṇa),<sup>10)</sup> 「効果的作  
用の能力のない法」(don byed mi nus pa'i chos)

73b1-74a1 2) 二諦の本質 (ngo bo) = 定義 (mtshan nyid,  
lakṣaṇa)<sup>11)</sup>

73b1-2 [1] 勝義諦の定義: 「語と分別知によって想定された  
ものに依存せずにそれ自体の本性の側から論理による  
考察に耐えるものとして成立しているもの」(sgra  
dang rtog pas btags pa la ma ltos par rang gi sdod  
lugs kyi ngos nas rigs pas dpyad bzod du grub pa)

73b2-3 [2] 世俗諦の定義: 「それ自体ではない作意などの語  
と分別知によって設定されただけのものとして成立し  
ているもの, あるいはそれ自体ではない語と分別知

(の働き) があるだけでそれ自体が認識されうるもの」  
 (rang las gzhan pa'i yid byed sogs sgra dang rtog pas  
 bzhag pa tsam du grub pa'am | rang las gzhan pa'i  
 sgra dang rtog pa yod pa tsam gyis rang nyid gzhal  
 nus pa)

- 73b3 [3] この定義はツォンカパの弟子ギャルツァブ・ダルマリンチェンとケードゥップ・ゲーレクペルサンポの説に従うものである<sup>12)</sup>
- 73b3-4 [4] PV III 3 は二諦の実例 (mtshan gzhi, lakṣya)<sup>13)</sup>を説くものであり、定義を説くものではない<sup>14)</sup>
- 73b4-5 [5] 「勝義の存在」(don dam par yod pa, paramārthasat) と「勝義諦」(don dam bden pa, paramārthasatya), 「世俗一般としての存在」(kun rdzob tsam du yod pa, saṃvṛtimātrasat) と「世俗諦」(kun rdzob bden pa, saṃvṛtisatya) というそれぞれ二つ(の概念)は、そうである遍充の範囲が等しい(yin mkhyab mnyam)<sup>15)</sup>
- 73b5-74a1 [6] 二諦の実例の独自性
- 73b5 (1) 唯心派 (sems tsam pa) との相違: 定義は一致するが、実例の立て方は異なる<sup>16)</sup>
- 74a1 (2) AK との相違: 壺は勝義諦である<sup>17)</sup>
- 74a1-3 3) 二諦の語義 (sgra bshad)<sup>18)</sup>
- 74a1-2 [1] 世俗諦の語義: 世俗の知(分別知)の側において真実なもの (blo kun rdzob pa'i ngor bden pa)
- 74a2 (1) 世俗 (kun dzob, saṃvṛti) の語義: 個物を実際に把握対象 (gzung yul) とすることを覆い隠す (sgrib pa)
- 74a2-3 [2] 勝義諦の語義: 勝義の知 (= 顕現対象に対して不迷乱な知, snang yul la ma 'khrul ba'i shes pa = 直接知覚, pratyakṣa, mngon sum) の側において真実であるもの (blo don dam pa'i ngor bden pa)
- 74a3-4 3. 聖典に従う経量部の二諦の定義と実例

- 74a3 1) 立て方は毘婆沙師の説 (=AK VI 4) と一致する  
 74a4 2) 毘婆沙師の説との相違: 存在するものは必ずしも実体 (rdzas, dravya) として成立しない<sup>19)</sup>

## 注記

- 1) 以下は「二諦についての主張の仕方」の前半部分、二諦の定義、語義に関する議論の内容詳説である。後半部分はアポーハ説の解釈とも言える普遍、あるいは語の意味 (sabdartha, sgra don), 分別知 (kalpana, rtog pa) についての議論であり、その内容詳説は次稿に譲る。
- 2) この注記には、引用文献の原文等のほか、ゲルク派による PV 注釈の主要なもの、ゲルマキールティの学説の解説書、経量部章をもつ学説綱要書などから、関連する記述を集めて記した。それぞれの意味するところは必ずしもチャンキヤの意図と一致しているとは言えない。詳しくは各論を直接参照されることをお勧めする。
- 3) この番号は科文番号である。附録を参照のこと。
- 4) 「経典にあるとおりのことを言葉どおりそのまま承認するという立場から学説を語る者」(mdo sde las ji ltar byung ba sgra ji bzhin du khas len pa tsam gyi sgo nas grub pa'i mtha' smra ba, *lCang skya Grub mtha'* 72b1f.) と説明される。チャンキヤは瑜伽行派にも同様の分類を適用する。*lCang skya Grub mtha'* (Sems tsam pa) 117b1f.: sa sde sogs kyi rjes 'brangs lung gtso bor smra ba lung gi rjes 'brangs dang | tshad ma'i bstan beos sde bdun mdo dang beas pa nas bshad pa ltar gyi rigs pa'i rjes 'brangs gnyis su yod pa ni grags che la | 「=『瑜伽師地論』などに従った聖典の教えを主に説くものが聖典に従う者であり、『確実な認識に関する七部の書』\*と『プラマーナサムッチャヤ』(*Pramāṇasamuccaya*) の教説のとおり論理に従う者の二(種)があるということはよく知られており」この分類は *'Jam dbyangs Grub mtha'* にも見られる。袴谷 1976: (2) ff., 1982: 44f. 参照。

\* ゲルマキールティに帰せられる七つの著作: *Pramāṇavārttika*, *Pramāṇaviniścaya*, *Hetubindu*, *Nyāyabindu*, *Samtānāntarasiddhi*, *Saṃbandhaparikṣā*, *Vādanāyā*.

- 5) *lCang skya Grub mtha'* (Bye smra ba) 63a4ff. を見よ。63a5に同じく AK VI 4 が引用される (gang la bcom dang blo yis gzhan || bsal na de blo mi 'jug pa || bum chu bzhin du kun rdzob tu || yod de don dam yod gzhan no || )。また *Rigs pa'i rgyan* 205a4-206a6 参照。
- 6) AK VI 4: yatra bhinne na tadbuddhir anyāpohe dhiyā ca tat | ghaṭāmbuvat\* samvṛtisat paramārthasad anyathā || (\*corrected: ghaṭārthavat Pradhan 1975) 「=例えば壺のように、壊れたとき、あ

るいは水のように、(分析的な)知によって(色などの構成要素である)他のものが除かれたとき、そのものの認識がなくなるもの、それが世俗の存在であり、勝義の存在は(それとは)別様のものである。」この偈は、実在と仮の存在(世俗の存在)に関する経量部の考えを説くものと解釈されてきたが(cf. e.g. Frauwallner 1958: 119-122)、近年ではむしろ有部、経量部に共通する思想であると理解されている(Katsura 1976, 御牧 1988: 238ff.)。チャンキヤも後者の立場であるが、経量部においては壺は勝義と設定される点異なる、と考える(注17)参照)。

- 7) 「『確実な認識に関する七部の書』に説かれているとおりの論理に従う経量部である。」(tshad ma sde bdun nas bshad pa ltar gyi rigs pa'i rjes su 'brangs pa'i mdo sde pa'o, *lCung skya Grub mtha'* 72b2) と説明される。上記注4) 参照。
- 8) PV III 3 (戸崎 1979: 61): arthakriyasamarthaṃ yat tad atra paramārthasat | anyat saṃvrtisat proktam te svasāmānyalakṣaṇe || 「＝ここで効果的作用の能力のあるものが勝義の存在であり、他は世俗の存在と言われる。それらは(それぞれ)個物、普遍である。」ただし、チャンキヤの引用するチベット訳は次のようである。don dam don byed nus pa gang || de 'dir don dam yod pa yin || gzhan ni kun rdzob yod pa ste || de dag rang spyi'i mtshan nyid bshad || 「＝勝義の効果的作用の能力のあるもの、それがここでは勝義の存在であり、他のもの(＝効果的作用の能力のないもの)が世俗の存在である。それらは(それぞれ)個物と普遍相と説かれる。」第一句中、don byed nus pa (arthakriyāsamārtha) に対する修飾語となる don dam (paramārtha) はサンスクリット原文には存在しないが、現存チベット大蔵経はこの訳を支持する(Miyasaka 1971/72: 43)。一方、サキヤ・パンディッタ(Sa skya Paṇḍita, 1182-1251)の *Rigs gter rang 'grel* 62a4には、don byed nus pa gang yin pa という原文に沿った訳が引用されており、don dam が必要か否かについてチベット人の間でも議論が為されている。Zwilling 1981: 306ff. は、ケードゥップの PV 註 *Rigs pa'i rgya mtsho* 9a4f., ジャムヤン・シェーベイドルジェ(Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje, 1648-1721)によるダルマリンチェンの PV 註 *Thar lam gsal byed* の註釈である *Tshad ma'i 'od brgya 'bar ba* 14a5-14b5にその議論が見られることを指摘している。また、*mNgon sum le'u ṭik* 16b1-4に、「効果的作用の能力のあるものは勝義の存在であることによって遍充される」ことが、デーヴェンドラブッディ(Devendrabuddhi, 7c.)の PV 註を拠り所として論じられている。なお、この偈とそのチベット訳の問題に関して、1997年11月1日京都大学における日本チベット学会で駒沢大学の金子宗

元氏の発表があり、詳しい資料が提示されたことを記しておきたい。また、PV とその諸注釈のチベット訳の変遷については、上記 Zwill-ing 1981の他、van der Kuip 1983: 31ff., Mejor 1991, Franco 1997などを参照せよ。

この偈の内容からすれば、paramārthasat を規定するものが artha-kriyāsamārtha なのであるから、後者に paramārtha という限定語を付けるのは余計なことと思われる。しかしながら、このようなチベット訳が生まれた背景には、続く PV III 4 において「効果的作用の能力は世俗において成立する」という考えが提示されていることと関連があろう。即ち、*aśaktaṃ sarvaṃ iti ced bījāder āṅkurādīṣu | dṛṣṭā śaktir matā sā cet saṃvṛtyā 'stu yathā tathā ||* 「＝もし、すべてのものは無能力である、と言うならば、(そうではない)。種などの芽などに対する能力が見られる。もし、それは世俗として考えられる、と言うならば、そうであろう。」ここでの反論者は中観派と見られており(戸崎 1979: 62)、最後の表現の解釈によっては、ダルマキールティが外界非実在論をとる瑜伽行派の立場に立って効果的作用の能力を世俗と認めた、という理解が成立しうる(戸崎 1989: 51-54参照)。また、中観の立場を認めたと考えることも可能であり、インドの注釈者たちの間に議論を引き起こした(松本 1980/81, 白崎 1986, Steinkellner 1990: 72, 75, 久間 1995など参照)。チベットでもこれについては意見が分かれている(Zwilling 1981: 308f., Yoshimizu 1993: 129-132, n. 57参照)。これによって効果的作用の能力の勝義と世俗による区分、さらにはそれが世俗のものであるならば、その能力の有無によってさらに世俗も二分されうるという解釈も起こったのである。

ダルマリンチェンは PV III 3 がなぜ *don dam don byed nus pa* というのか、その理由について *Thar lam gsal byed* 211a3ff. で次のように述べている。*'dir don dam don byed nus pa gang || zhes don dam gyi khyad par smos pa'i dgos pa ni || kun rdzob tsam du don byed nus par 'dod pa dag gi log rtog dgag pa'i ched du tshig zur phyin par smos pa yin gyi | don byed nus pa la don dam par don byed nus pa dang mi nus pa gnyis su 'byed pa ni | dbu sems la sogs pa'i grub mtha' gzhi gang las gyes pa dang | mi mthun pa'i tshul la sogs pa'i rnam gzhang legs par ma go ba'i bab col 'ba' zhig yin no ||* 「＝ここで『勝義の効果的作用のあるもの』と『勝義』という限定が述べられた必然性は(何かと言うと)、世俗のみとして効果的作用の能力を認める者たちの誤った考えを否定するために、言葉使いを明確にして(そのように)述べられたのであって、効果的作用の能力について、勝義として効果的作用の能力があるものないものの二つに分けるの

は、中観、唯識などの学説のいずれの基本(思想)からもはずれたものであり、[この経量部の思想が他派とは]一致しないあり方などの設定を正しく理解しない妄言にすぎないのである。]

中観派は世俗においてもそれぞれの作用を認める、という主張は、ツォンカパの眼目であった。それを述べるため、*Lam Rim*で彼はしばしば *don byed nus pa* という表現を用いている (Yoshimizu 1993: 126-140, 1994: 343-348, 1997: 1103-1106参照)。また、ダルマリンチェンは「瑜伽行派はいかなる効果的作用であれ、二諦に関連しては勝義諦とは承認なさない」と明記している (*Thar lam gsal byed* 211b2f.)

- 9) Cf. *Se ra Grub mtha'* 4b3f.: *don dam bden pa | bden par grub pa | dngos po | byas pa | mi rtag pa | 'dus byas | rdzas | rang mtshan rnams don gcig | ... kun rdzob bden pa | rdzun par grub pa | rtag pa | spyi mtshan rnams don gcig |* 「=勝義諦、真実として成立しているもの、実在物、作られたもの、無常なるもの、有為(法)、実体、個物は同義である。... 世俗諦、虚偽として成立しているもの、常住なもの、普遍相は同義である。」; *'Jam dbyangs Grub mtha'* 154blf.: *don dam par don byed nus pa | don dam bden pa dang | don dam du grub pa dang | rang mtshan du 'jog | de ltar mi nus pa'i chos kun rdzob bden pa dang | kun rdzob tu grub pa dang | spyi mtshan du 'jog |* 「=勝義として効果的作用の能力のあるものを、勝義諦、勝義として成立しているもの、個物と設定し、そのように(勝義として効果的作用の)能力のない法を、世俗諦、世俗として成立しているもの、普遍相と設定する。」; *dKon mchog Grub mtha'* (Mimaki 1977: 84f.): *dngos po dang | don dam bden pa dang | rang mtshan dang | mi rtag pa dang | 'dus byas dang | bden grub rnams don gcig | ... dngos med kyi chos dang | kun rdzob bden pa dang | spyi mtshan dang | rtag pa dang | 'dus ma byas kyi chos dang | rdzun par grub pa rnams don gcig |* 「=実在物、勝義諦、個物、無常なもの、有為(法)、真実として成立しているものは同義である。... 非実在の法、世俗諦、普遍相、常住なもの、無為法、虚偽として成立しているものは同義である。」
- 10) ゲルク派においては、*spyi mtshan* (*sāmānyalakṣaṇa*) と *spyi* (*sāmānya*) は区別される。前者は非実在であるが、後者は個物(*rang mtshan*, *svalakṣaṇa*) に随伴して実在しうる。従って、本稿では、ゲルク派の文脈においては前者を「普遍相」、後者を「普遍」と訳し分けるが、「個物」、「普遍相」のいずれも、本来のディグナーガ、ダルマキールティの用法とは意味が異なって用いられている。即ち、「個物」とは有為法であり、「山の上の火」という直接知覚されない

推論の対象であっても、個物と考えられる。「普遍相」とは虚空などの無為法のことである。従って「普遍相」という訳語は適切ではないが、混乱を避けるため現段階ではそれを用いることとする。Yoshimizu 1996: 192 Anm. 426, 1997: 1114, ns. 39, 41など参照のこと。

- 11) Cf. *Tshad ma'i brjed byang* 34a1f.: kun rdzob bden pa'i mtshan nyid ni blo kun rdzob pas btags pa tsam du grub pa'i chos so || don dam bden pa'i mtshan nyid rtog pas btags pa tsam ma yin par yul rang gi ngos nas grub pa 「＝世俗諦の定義とは、世俗の知によって想定されただけのものとして成立している法である。勝義諦の定義とは、分別知によって想定されただけではなく対象自らの側から成立しているもの（である）。」； *mNgon sum le'u tik* 17a6f.; don dam bden pa'i mtshan nyid rtog pas btags pa la ma ltos par rang gi ngo bos dpyad bzod du grub pa | kun rdzob bden pa'i mtshan nyid rang gi ngo bo sgra rtog gis bzhag pa tsam du grub pa zhes bya'o || 「＝勝義諦の定義とは、分別知によって想定されたものに依存せず自らの本質として考察に耐えるものとして成立しているものであり、世俗諦の定義とは、自らの本質が語と分別知によって設定されただけのものとして成立しているものと言われる。」； *Yid kyi mun sel* 44a6f.: don dam bden pa'i mtshan nyid | rtog pas btags pa tsam ma yin par rang ngos nas grub pa'i chos | kun rdzob bden pa'i mtshan nyid | rtog pas btags pa tsam du grub pa'i chos so || 「＝勝義諦の定義は、分別知によって想定されただけではなく自らの側から成立している法であり、世俗諦の定義は、分別知によって想定されただけのものとして成立している法である。」； *dKon mchog Grub mtha'* (Mimaki 1977: 84): sgra dang rtog par btags pa la ma ltos par rang gi sdod lugs kyi ngos nas rigs pas dpyad bzod du grub pa'i chos de don dam bden pa'i mtshan nyid | ... rtog pas btags pa tsam du grub pa'i chos de kun rdzob bden pa'i mtshan nyid | 「＝語と分別知において想定されたものに依存せず自らの本性の側から論理による考察に耐えるものとして成立しているところのかの法が勝義諦の定義である。... 分別知によって想定されただけのものとして成立しているところのかの法が世俗諦の定義である。」； *Rigs pa'i rgyan* 206b2f.: don dam bden pa'i mtshan nyid | rtog pas sgro ma btags par don byed nus pa | kun rdzob bden pa'i mtshan nyid | rtog pas sgro btags pa'i chos | 「＝勝義諦の定義は、分別知によって増益されず、効果的作用のあるものであり、世俗諦の定義は、分別知によって増益された法である。」

セラ・チューキギャルツェン (Se ra Chos kyi rgyal mtshan, 1478-1546) は、これらゲルク派に広く承認された二諦の定義を採らず、勝義における効果的作用の能力 (上記注 8) 参照) の有無をその

定義の基準としている。*Se ra Grub mtha'* 4b3: don dam par don byed nus pa'i chos de | don dam bden pa'i mtshan nyid | ... don dam par don byed mi nus pa'i chos | kun rdzob bden pa'i mtshan nyid | 「=勝義として効果的作用の能力のある法, それが勝義諦の定義である。... 勝義として効果的作用の能力のない法が世俗諦の定義である。」

12) 上記注11) 参照。

13) mtshan gzhi: (1) mtshan nyid kyis mtshon bya mtshon pa'i gzhir gyur pa | dper na | gser bum de bum pa'i mtshan gzhi yin pa lta bu'o || (2) mtshon bya'i khyad par ram dpe (『藏漢大辞典』) 「= (1) 定義によって定義づけられるものを示す基体となるもの。例えば, この金の壺は壺の定義に該当する実例である, というようなものである。(2) 定義づけられる個々のもの, あるいは例。」

mtshan gzhi は mtshon bya と共に lakṣya の訳語として用いられ, 本来両者の間に意味の差異があったかどうかは疑問である。この点については, チベット人の間でも議論がなされている。van der Kuip 1983: 67f., 小野田 1984, 木村 1993: (50) n. 11, (55), 1996: (41) n. 21 参照。また, インドの文献において mtshan gzhi が lakṣya の訳語として用いられていると思われる例は, PVinT, PVT などに見られる。木村 1993: (50) n. 11, Funayama 1992: 59 n. 39 の引用文を参照のこと。

14) Cf. *Thar lam gsal byed* 210b6f.: bden gnyis kyi mtshan nyid ston pa la sbyar na yang rung tsam yod mod kyi | gtso bo ni bden nyid kyi mtshan gzhi ngos 'dzin yin te | 「= [PV III 3 を] 二諦の定義の説示に該当させても妥当性はあることにはあるが, 主な [その偈の意図] は, 二諦の実例を確認することなのである。」; *mNgon sum le'u fik* 17a5f.: don byed nus pa dang | rang mtshan don dam bden pa'i mtshan gzhi dang | don byed mi nus pa'i chos dang spyi mtshan kun rdzob bden pa'i mtshan gzhir bshad pa yin gyi | de dag bden gnyis so so'i mtshan nyid 'dis bstan pa ma yin la | 「=効果的作用の能力のあるものと個物とは勝義諦の実例であり, 効果的作用の能力のない法と普遍相とは世俗諦の実例として [PV III 3 に] 説かれているのであって, それらは二諦それぞれの定義としてこれ [=PV III 3] によって説かれているのではないのである。」; *Yid kyi mun sel* 44b1ff.: kha cig || don dam don byed nus pa gang || de 'dir don dam yod pa yin || ces sogs kyis don dam bden pa dang rang mtshan gnyis kyi mtshan nyid bstan pa yin ces 'dod pas ni | yi ge tsam la 'od ma bltas par zad de | de dag rang rang spyi'i mtshan nyid bshad | ces byung gi | rang spyi'i mtshan nyid kyi mtshan nyid bshad ces mi 'byung ba'i phyir dang | gang zhes pa dang | de zhes pa'i tshig gi nus pa dang skabs stobs las |



rkang pa dang po gnyis ni | don dam pa'i ngor don byed nus pa la don  
dam par yod pas khyab | ces pa'i khyab pa ston pa tsam gyi ched du  
smos pa'i gzhung yin pa'i phyir ro || 「= 『勝義の効果的作用の能力  
のあるところのもの、それがここでは勝義の存在である』 (PV III  
3ab) 云々によって勝義諦と個物両方の定義が説かれているのである、  
とある人は主張するが、(それ)は、単に文字についてよく見なかつ  
ただけである。『それらはそれぞれ個物と普遍相と説かれる』 (PV III  
3d) とあって、『個物、普遍相の定義と説かれる』とはないからであ  
り、また、『であるところのもの』と『それが』という言葉の力と文  
脈から、この最初の二句は、勝義の側における効果的作用の能力の  
あるものが勝義の存在であることによって遍充されることを示すだ  
けのために述べられたテキストであるからである。」

しかしながら、*dKon mchog Grub mtha'* は「勝義諦の実例は例えば  
壺であるけれども」(Mimaki 1977: 85: don dam bden pa'i mtshan  
gzhi bum pa lta bu yang |), 「勝義として効果的作用の能力のある法  
は個物の定義であり、実例は例えば壺である。勝義として効果的作  
用の能力のない法は普遍相の定義であり、実例は例えば無為である  
虚空である。」(*loc. cit.*: don dam par don byed nus pa'i chos de | rang  
mtshan gyi mtshan nyid | mtshan gzhi ni | bum pa lta bu | don dam  
par don byed mi nus pa'i chos de | spyi mtshan gyi mtshan nyid |  
mtshan gzhi ni | 'dus ma byas kyi nam mkha' lta bu |) と述べる。

- 15) yin mkhyab mnyam: phan tshun gcig yin na | cig shos kyang yin dgos  
pa'i don de | dper na | byas pa dang dngos po gnyis yin khyab mnyam  
yin pas | byas pa yin na dngos po yin pas khyab | dngos po yin na  
byas pa yin pas khyab lta bu'o || (『藏漢大辞典』) 「= (二つの概念  
が) 互いに同一のものを (指す) ならば、(一方であるならば) 必然  
的に他方でもあるという意味である。例えば、『作られたもの』と  
『实在物』の二つ (の概念) は、そうである遍充の範囲が等しいので、  
作られたものであるならば、实在物であることによって遍充され、  
实在物であるならば作られたものであることによって遍充される、  
というごとくである。」 Cf. *mNgon sum le'u ṭik* 17b1f: don dam par  
yod pa dang don dam bden pa yin mkhyab mnyam dang | kun rdzob  
tsam du yod pa dang kun rdzob bden pa yin khyab mnyam |
- 16) Cf. *ICang skya Grub mtha'* (Sems tsam pa) 130a2, 5, 130b4f: kun rdzob  
bden pa'i ngo bo ni kun nas nyon mongs pa skye rung gi dmigs pa'i  
chos tha snyad pa'o || ... don dam bden pa'i ngo bo ni rnam dag lam  
gyi dmigs pa mthar thug tu gyur pa'i chos so || ... kun rdzob bden pa'i  
mtshan gzhi ni | gzhan dbang dang kun btags kyis bsdus pa'i chos  
rnam so || don dam bden pa'i mtshan gzhi ni | bdag med pa gnyis so

|| 「＝世俗諦の本質は、煩惱が生じうる対象となるところの言語表現された法である。…勝義諦の本質とは、清浄なる道の対象となる究極の法である。…世俗諦の実例は、依他起と遍計（の性質に）まとめられる諸々の法である。勝義諦の実例は、二つの無我である。」; *Yid kyi mun sel* 50b2ff.: de ltar sde bdun du gzhan ngor mdo sde pa'i grub mtha' khas blangs pa'i rnam gzhag dang | rang lugs rnam rig pa'i lugs khas len pa'i rnam gzhag gnyis ka la yang | rang mtshan yin na don dam bden pa yin dgos pa dang | dngos po yin na rang mtshan yin dgos par 'dod pa la khyad par med la | de'i phyir don dam bden pa'i mtshan nyid la mi mthun pa med do || 'on kyang bden gnyis kyi mtshan gzhi la mi mthun pa yin te | 'di ltar rang mtshan yin na don dam dang | spyi mtshan yin na kun rdzob tu 'dod par 'dra yang | mdo sde pa phyi rol gyi don rang mtshan don dam bden par khas len la | sems tsam pa phyi rol gyi don gzhi ma grub par 'dod pa'i phyir ro || 「＝そのように、（ダルマキールティの）『七部書』に、他（派）の立場として承認された経量部の学説の設定と、自派たる唯識派の学説を承認する設定とのいずれにおいても、個物であるならば勝義諦であるはずであり、実在であるならば個物であるはずであると主張することに違いはなく、それ故勝義諦の定義にも一致しないところはないのである。しかしながら、二諦の実例については（両者は）一致しない。即ち、個物であるならば勝義であり、普遍相であるならば世俗と主張する点は同じであるが、経量部は、外界の対象は個物であり、勝義諦であると主張するが、唯心派は、外界の対象は基体として不成立である [=存在しない、確実な認識によって把握されない] と主張するからである。」。また *Rigs pa'i rgyan* 207b5f., 209a2f. 参照。

- 17) AK では蜜は世俗諦である。Cf. *lCang skya Grub mtha'* (Bye smra ba) 63b2-64a3: kun rdzob bden pa'i mtshan gzhi ni bum pa dang | bum pa'i nang gi chu lta bu'o || kun rdzob bden pa zhes brjod pa'i rgyu mtshan ni | bcom gzhig gis rang gi blo 'dor du rung ba'i bum pa la sogs pa de dag la kun rdzob tu bum pa la sogs pa'i ming gis btags pa yin pas kun rdzob kyi dbang gis bum pa la sogs pa de dang de'o zhes brjod pa na bden pa kho nar smras pa yin gyi rdzun pa ni ma yin pas kun rdzob kyi bden pa zhes brjod par mdzod rang 'grel las bshad la | ... don dam bden pa'i mtshan gzhi ni | gzugs dang tshor ba dang 'du shes dang sems sems byung rang rkya ba rnams yin no || don dam bden pa zhes brjod pa'i rgyu mtshan ni | gang la bcom pa la sogs pas bsal yang rang gi blo 'dor du mi rung ba'i gzugs la sogs pa de dag ni nges par don dam par yod pa'i phyir | don dam bden pa zhes brjod par rang 'grel las gsungs pa dang | yang na | dam pa ni 'jig rten las

'das pa'i ye shes yin la de'i don du yod pa'i yul yin pas don dam pa'i bden pa ste | 「= 世俗諦の実例は、壺、壺の中の水といったものである。世俗諦と言われる理由は、破壊によってそれ自体の認識が捨てられるべき壺などのそれらのものについて、世俗として『壺』などの名称によって（その存在が）仮に想定されるのであるから、世俗の力によって、壺などのかれこれである、と言われるとき、全く真実のものとして語られるのであって、虚偽のものではないので世俗諦と言われると『アビダルマコーシャ』自注に説かれている。…勝義諦の実例は、色と感受、想念、心、心所などの独立自存のものである。勝義諦と言われる理由は、破壊などによってあるものについての（認識が）除かれても、それ自体の認識は捨てられえないところの色などのそれらのものは、確かに勝義として存在するがゆえに、勝義諦と言われると（『アビダルマコーシャ』）自注にお説きになられており、また、『勝れたもの』とは出世間の智慧であり、その対象として存在する境であるので、勝義諦である。」； *Tshad ma'i brjed byang* 34a2f.: ... mdzod nas bshad pa'i bden gnyis dang 'jog tshul mi gcig ste | de nas bum pa la sogs pa bcoms pas de'i blo 'dor du rung ba la kun rdzob tu bzhag la | 'dir rang gi mtshan nyid kyis grub pa la don dam par grub par bzhag pas der kun rdzob kyi mtshan gzhir bshad kyang | 'dir don dam pa'i mtshan gzhir bzhag pa yin no || 「=（ダルマキールティの『七部書』の説は）『アビダルマコーシャ』に説かれている二諦とは設定の仕方が一致しない。それ（『アビダルマコーシャ』）よれば、壺などの、破壊されるとその認識が捨てられるべきものに対して、世俗と設定し、こちら（『七部書』）では、本来のあり方として成立しているものについて、勝義として成立していると設定されるので、前者で世俗諦の実例として説かれていても、後者では勝義諦の実例として設定されるのである。」 上記注6）参照。また *Rigs pa'i rgyan* 206a2-6参照。

- 18) Cf. *Tshad ma'i brjed byang* 33b5ff. (ほぼ同様の解説が *Yid kyi mun sel* 43b5ff. にも見られる) : gang gi rang gi ngo bo yis || gzhan gyi ngo bo sgrib byed pa || sgrib byed de dag tha dad kyang || zhes pa'i 'gyur rnying la | kun rdzob de dag tha dad kyang | \* zhes 'byung ba ltar | de kho na nyid mthong ba la sgrib pa kun rdzob kyi sgra bshad pa'i don du grub mtha' smra ba phal cher mthun la | rang mtshan dngos su gzung yul du byed pa sgrib pa'i blo kun rdzob pas bzhag pa'i don de nyid kun rdzob bden pa zhes bya ste | de'i ngor bden pa'i phyir ro || (\*kun rdzob des bdag tha dad kyang || *Yid kyi mun sel*) 「= 『ある(知)』が自らの形象によって他の形象を覆い隠す。覆い隠すものはそれら別々であるものも』 (PV I 68cd-69a) という(偈)の旧訳には、

(69a は)『世俗はそれら別々であるもの』とあるがごとく、真実を見ることを覆い隠すというのが世俗の語義の内容であることについて大部分の学派の説は一致しており、個物を実際の把握対象とすることを覆い隠す世俗の知によって設定されたその対象それ自体が世俗諦と言われる。その(知の)側では真実であるからである。』*'jam dbyangs Grub mtha'* 154b4f.: 'dus ma byas kyi nam mkha' sogs chos can | kun rdzob bden pa zhes bya ste | blo kun rdzob pa rtog pa'i ngor\* bden pas de skad brjod pas so | (\*corrected: ngo bor) 「=無為の虚空などが主題である。(それらは) 世俗諦と言われる。世俗の知である分別知の側で真実であるのでそのように言われるからである。」; *dKon mchog Grub mtha'* (Mimaki 1977: 85): 'dus ma byas kyi nam mkha' chos can | kun rdzob bden pa zhes bya ste | blo kun rdzob pa rtog pa'i ngor bden pa'i phyir ro || 'di'i kun rdzob pa ni rtog pa ste | rang mtshan mngon sum du mthong ba la sgrib pas na kun rdzob pa zhes bya'o || 「=無為の虚空が主題である。(それは) 世俗諦と言われる。世俗の知である分別知の側で真実であるからである。これについて『世俗』とは分別知のことであり、個物を直接に見ることを覆い隠すので『世俗』と言われるのである。」

序論脚注 8 を合わせて参照のこと。PV I 69a のチベット訳旧訳について、kun rdzob de dag tha dad kyang, あるいは kun rdzob des bdag tha dad kyang というのは、ケードアップによれば、マ (rMa=rMa dGe ba'i blo gros, 1044-1090) の訳である (*Rigs pa'i rgya mtsho* 85b1)。バヴィヤラージャ (Bhavyaraja) とゴク・ローデンシェーラブ (rNgog Blo ldan shes rab, 1059-1109) の修正の加わる前の訳ということであろうか。Franco 1997: 278 など参照。

*Yid kyi mun sel* 44a2-6: don dam bden pa'i sgra bshad la || nyan thos sde pa kha cig ni || rigs pas dpyad bzod du bden pa'i phyir don dam bden pa zhes 'dod la | sde bdun rigs pa'i rjes su 'brang ba'i mdo sde pa dang | sems tsam pa dag phyogs 'di la mthun pa yin cing | de yang don dam pa zhes pa'i sgra bshad pa'i gzhi shes pa ma 'khrul pa la byas nas de'i ngor bden pa'i phyir | don dam bden pa zhes bya la | shes pa de'i gzung yul du grub pa'i phyir don dam par grub pa zhes bya'o || 'on kyang mdo sems gnyis don dam dngos yul du byed pa'i blo shes pa ma 'khrul pa la 'dod par 'dra yang | shes pa ma 'khrul ba'i mtshan gzhi la mi mthun te | sems tsam pa gzhan rig mngon sum thams cad 'khrul shes su 'dod la | mdo sde pa ma 'khrul ba'i shes par 'dod pa lta bu'o || 「=勝義諦の語義について、声聞の部派のある者は、論理による考察に耐え、真実であるから勝義諦と言われる、と主張し、『七部書』の論理に従う経量部と唯心派の者たちはこの点について

ては（彼らと考えが）一致する。そしてまた、勝義という語を説明する基準となるものは不迷乱な知であるとして、その側で真実であるから勝義諦と言われ、その知の把握対象として成立しているがゆえに勝義として成立していると言われるのである。しかしながら、経量部と唯心派の二つは、勝義を実際の対象とする知は不迷乱な知であると主張する点では同じであるが、不迷乱な知の実例については（考えが）一致しない。唯心派は、（自己認識以外の）他を認識するすべての直接知覚を迷乱知だと主張し、経量部は（それを）不迷乱な知と主張するがごとくである。」； *Jam dbyangs Grub mtha'* 154b4: mngon sum gyi snang yul dngos po rnams chos can don dam bden pa zhes brjod de | blo don dam pa snang yul la ma 'khrul pa'i mngon sum gyi ngor\* bden pas de skad brjod pas so || (\*corrected; ngo bor) 「＝直接知覚の顕現対象である諸物が主題である。（それらは）勝義諦と言われる。勝義の知である顕現対象に対して不迷乱なる直接知覚の側で真実であるのでそのように言われるからである。」； *dKon mchog Grub mtha'* (Mimaki 1977: 85): bum pa chos can | don dam bden pa zhes bya ste | blo don dam pa'i ngor bden pa'i phyir | 'di'i blo don dam pa ni snang yul la ma khrul ba'i shes pa la bya'o || 「＝壺が主題である。（それは）勝義諦と言われる。勝義の知の側で真実であるから。これについて勝義の知とは、顕現対象に対して不迷乱なる知について言われるのである。」また *Rigs pa'i rgyan* 206b3-6参照。

- 19) 有部も存在するもの (yod pa, sat) には、実在と仮の存在があることを認めているので、ここで言う「存在」とは法 (dharma) としての存在であろう。有部にとって無為法なども実在し、すべての法は実体 (rdzas, dravya) に含まれるが、経量部にとっては無為法は非実在、非実体である。

附録 経量部章科文 (Sa bcad)

- 1 sgra bshad pa (72a5-72b1)
- 2 dbye ba (72b1-3)
- 3 grub mtha'i 'dod tshul (72b3-98b3)
  - 31 gang gi rjes su 'brangs pa'i bzhung (72b3-73a2)
  - 32 de'i rjes su 'brangs te grub mtha'i 'jog tshul (73a2-98b3)
    - 321 gzhi'i 'dod tshul (73a2-90b3)
      - 3211 spyir bshad pa (73a3-86a5)
        - 32111 **bden pa gnyis kyi 'dod tshul (73a3-79a1)**
        - 32112 rtag mi rtag dang phyi don 'dod tshul (79a1-86a5)
          - 321121 rtag mi rtag gi 'dod tshul (79a1-84b4)
            - 3211211 rtag mi rtag gi 'dod tshul dngos (79a1-83a1)
            - 3211212 zhar byung sel ba'i rnam bzhag (83a1-84b4)
          - 321122 phyi don 'dod tshul (84b4-86a5)
            - 3211221 dngos (84b5-85b4)
            - 3211222 rnam par rig byed ma yin pa'i gzugs kyi 'dod tshul (85b4-86a5)
  - 3212 shes pas yul 'dzin tshul gyi khyad par bye brag tu bshad pa (86a5-90b3)
    - 32121 dngos (86a5-88b4)
    - 32122 'jal byed tshad ma'i rnam bzhag (88b4-89b4)
    - 32123 de'i yan lag gtan tshigs bshad pa (89b4-90b3)
- 322 lam gyi 'dod tshul (90b3-96a5)
- 323 'bras bu'i 'dod tshul (96a5-98b3)

## 略号及び参考文献 (アルファベット順)

- AK Vasubandhu, *Abhidharmakośa*. See AKBh.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, P. Pradhan (ed.), Patna 1975.
- AS *Abhidharma samuccaya of Asanga*, P. Pradhan (ed.), Santiniketan 1950.
- BCAP *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, P.L. Vaidya (ed.), Buddhist Sanskrit Texts 12, Darbhanga 1960.
- lCang skya Grub mtha' lCang skya Rol pa'i rdo rje, *Grub pa'i mtha' rnam par bzhag pa gsal bar bshad pa thub bstan lhun po'i mdzes brgyan*, Peking Edition, *Buddhist Philosophical Systems*, Lokesh Chandra (ed.), Śata-Piṭaka-Series 233, New Delhi 1977. 他に, Klein 1991に収録された Sarnath, Varanasi 1970の出版のもの, 中国版『宗教流派論』(章嘉教派論), 中国蔵学出版社, 青海省 1989がある。
- Dreyfus 1992 Georges Dreyfus, "Universals in Indo-Tibetan Buddhism", *Tibetan Studies, Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Narita 1989*, Narita, vol. 1, 29-46.
- Dreyfus 1994 Id. (ed. in collaboration with Shunzo Onoda), *A Recent Rediscovery: Rgyal-tshab's Rigs gter rnam bshad*, a Facsimile Reproduction of Rare Blockprint Edition, Kyoto.
- Dreyfus 1997 Id., *Recognizing Reality, Dharmakīrti's Philosophy and its Tibetan Interpretations*, Albany.
- Eckel 1987 M. David Eckel, *Jñānagarbha's Commentary on the Distinction between the Two Truths*. State University of New York Press.
- 江島 1980 江島恵教「中観学派における対論の意義—特にチャンドラキールティの場合」『仏教思想史』3, 平楽寺書店, 147-178。
- Franco 1997 Eli Franco, "The Tibetan Translations of the *Pramāṇavārttika* and the Development of Translation Methods from Sanskrit to Tibetan", *Tibetan Studies, Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995*, Wien, vol. 1, 277-288.
- Frauwallner 1958 Erich Frauwallner, *Die Philosophie des Buddhismus*, Berlin.
- Funayama 1992 Toru Funayama, "A Study of *kalpanāpoḍha*, a Translation of the *Tattvasaṃgrahapañjikā* by Kamalaśīla on the Definition of Direct Perception", *Zinbun, Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University* 27, 33-128.
- 袴谷 1976 袴谷憲昭「唯識の学系に関するチベット撰述文献」『駒沢大学

- 仏教学部論集』7, (1)-(25).
- 袴谷 1982 同「瑜伽行派の文献」『講座大乘仏教 8 唯識思想』春秋社, 43-76.
- 一郷 1985 一郷正道『中観莊嚴論の研究—シャーントラクシタの思想』文栄堂。
- 'Jam dbyangs Grub mtha'
- 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje Ngag dbang brtson 'grus, *Grub mtha' nam bshad rang gzhan grub mtha' kun dang zab don mchog tu gsal ba kun bzang zhing gi nyi ma lung rigs rgya mtsho skye dgu'i re ba kun skongs*, bKra shis 'khyil Edition, *The Collected Works* 14, Ngawang Gelek Demo (ed.), New Delhi 1973.
- JN *Jñānaśrīmitranibandāvalī*, A. Thakur (ed.), Tibetan Sanskrit Works Series 5, Patna 1989 (Second ed. 1987).
- 加藤 1989 加藤純章『経量部の研究』春秋社。
- Katsura 1976 Shoryu Katsura, "On *Abhidharmakośa* VI 4", *Indological Review* (『インド学報』) 2, 28.
- 木村 1993 木村誠司「分別について」『駒沢大学仏教学部研究紀要』51, (41)-(55)。
- 木村 1996 同「チベットにおける『ブ라마ーナの定義』」『駒沢短期大学仏教論集』2, (23)-(43)。
- Klein 1991 Anne C. Klein, *Knowing, Naming & Negation, a Sourcebook on Tibetan Sautrāntika*, New York.
- dKon mchog Grub mtha'
- dKon mchog 'jigs med dbang po, *Grub mtha' nam bzhag rin chen phreng ba*, see Mimaki 1997.
- van der Kuijp 1983 Leonard van der Kuijp, *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, ANIS 26, Wiesbaden.
- 久間 1995 久間泰賢「Jñānaśrīmitra における arthakriyā—二諦説に関連して」『仏教文化』32・33, (45)-(59)。
- Lam rim Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, *Lam rim chen mo*, bKra shis lhun po Edition, *The Collected Works of Tsong kha pa*, 19 & 20, Ngawang Gelek Demo (ed.), New Delhi 1977.
- MA' *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti, Traduction tibétaine*, publ. par L. de La Vallée Poussin, St. Petersburg, 1907-1912.
- MAI Śāntarakṣita, *Madhyamakālamkāra*. D3884, P5284.
- MAIV Id., *Madhyamakālamkāravṛtti*. D3885, P5285.
- 松本 1980/81 松本史朗「仏教論理学派の二諦説 (上・中・下)」『南部仏教』45-47, 101-118, 38-54, 44-62。



- 松本 1984 同「後期中観派の空思想—瑜伽行中観派について」『理想』610, 140-159。
- Mejor 1991 Marek Mejor, "On the Date of the Tibetan Translations of the *Pramāṇasamuccaya* and *Pramāṇavārttika*", *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition, Proceedings of the 2nd International Dharmakīrti Conference, Vienna 1989*, E. Steinkellner (ed.), Wien, 175-210.
- Mimaki 1976 Katsumi Mimaki, *La réfutation bouddhique de la permanence des choses (sthiraśiddhidūṣaṇa) et la preuve de la momentanéité des choses (kṣaṇabhaṅgasiddhi)*, Paris.
- Mimaki 1977 Id. (ed.), "Le *Grub mtha' mam bzhaḡ rin chen phreng ba* de dKon mchog 'jigs med dbang po (1728-1791)", *Zinbun, Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University* 14, 55-112.
- 御牧 1982 御牧克巳「チベットにおける宗義文献（学説綱要書）の問題」『東洋学術研究』21-2, 179-192.
- 御牧 1988 同「経量部」『岩波講座東洋思想8 インド仏教』, 226-260.
- Miyasaka 1971/72 Yūsho Miyasaka (ed.), "Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan)", *Acta Indologica* (『インド古典研究』) 2, Naritasan Shinshoji, 1-206.
- mNgon sum le'u ṭik mNgon sum le'u'i ṭikk rje'i gsung bzhin mkhas grub chos rjes mdzad pa, bKra shis lhun po Edition, *The Collected Works of Tsong kha pa* 22, Ngawang Gelek Demo (ed.), New Delhi 1978.
- 小野田 1984 小野田俊蔵「mtshan ṇid と mtshon bya について」『印度学仏教学研究』33-1, (92)-(95)。
- Pr *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasamapadā Commentaire de Candrakīrti*, publ. par L. de La Vallée Poussin. St. Pétersbourg 1903-1913; D3860, P5260.
- PV I Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika I* (Svārthanumāna): *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the auto-commentary, Text and Critical Notes*, Raniero Gnoli (ed.), Rome 1960.
- PV III Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika III* (Pratyakṣa). 戸崎 1979を見よ。
- PVBh *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṃkāra of Prajñākaraḡupta*, Rāhula Sāṃkrṭyāyana (ed.), Tibetan Sanskrit Works Series 1, Patna 1953.
- PVinṭ Darmottara, *Pramāṇaviniścayaṭikā*. P5727.
- PVSV Dharmakīrti, *Pramāṇavārttikasvavṛtti*, see PV I.
- PVṭ Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttikaṭikā*. D4220, P5718.
- Rigs pa'i rgya mtsho

- mKhas grub dGe legs dpal bzang po, *rGyas pa'i bstan bcos tshad ma nam 'grel gyi rgya cher bshad pa rigs pa'i rgya mtsho*, gSung 'bum, Tha (lHa sa Edition).
- Rigs pa'i rgyan dGe 'dun grub, *Tshad ma'i bstan bcos chen po rigs pa'i rgyan*, gSung 'bum, Nga ('Bras spungs Edition), Gangtok 1979.
- Rigs gter rang 'grel Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rang 'grel*, *The complete works of the great masters of the Sa skya sect of the Tibetan Buddhism* 5, Toyo Bunko 1968.
- SDV Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga*. D3881, see Eckel 1987.
- Se ra Grub mtha' Se ra rje btsun Chos kyi rgyal mtshan, *Grub mtha'i nam gzhang*, *Textbooks of Se ra Monastery*, Tshulkrhim Kelsang & Shunzo Onoda (eds.), Biblia Tibetica Series, Kyoto 1985.
- 白崎 1986 白崎顕成『『ダルマキールティは中観論者である』』『仏教論叢』30, 110-114。
- Steinkellner 1990 Ernst Steinkellner, "Is Dharmakīrti a Mādhyamika?" *Earliest Buddhism and Madhyamaka, Panels of the 7th World Sanskrit Conference, Leiden 1987*, D. Seyfort Ruegg & L. Schmithausen (eds.), vol. 2, 72-90.
- Thar lam gsal byed rGyal tshab Dar ma rin chen, *Tshad ma nam 'grel gyi tshig le'ur byas pa'i nam bshad thar lam phyin ci ma log par gsal bar byed pa*, gSung 'bum, Cha (lHa sa Edition).
- Tillemans 1995 Tom J. F. Tillemans, "On the so-called difficult point of the apoha theory", *Asiatische Studien/Études Asiatiques* 49-4, 853-889.
- 戸崎 1979 戸崎宏正『仏教認識論の研究』(上), 大東出版社。
- TS *Tattvasaṃgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalashīla*, Dvarikadas Shastri (ed.), 2 vols., Varanasi 1981, 1982 (Bauddha Bharati Series 1 & 2).
- Tshad ma'i brjed byang rGyal tshab chos rjes rje'i drung du gsan pa'i tshad ma'i brjed byang chen mo, bKra shis lhun po Edition, *The Collected Works of Tsong kha pa* 22, Ngawang Gelek Demo (ed.), New Delhi 1978.
- Tshad ma'i 'od brgya 'bar ba 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje, *Tshad ma nam 'grel gyi mtha' dpyod thar lam rab gsal tshad ma'i 'od brgya 'bar ba*, bKra shis 'khyil Edition, *The Collected Works* 13, Ngawang Gelek Demo (ed.), New Delhi 1974.
- TSP Kamalaśīla, *Tattvasaṃgrahapañjikā*, see TS.
- Yid kyi mun sel mKhas grub dGe legs dpal bzang po, *Tshad ma sde bdun gyi*

- rgyan yid kyi mun sel, gSung 'bum, Tha* (lHa sa Edition).
- Yoshimizu 1993 Chizuko Yoshimizu, "On *rañ gi mtshan ñid kyis grub pa* III. Introduction and Section I", *Journal of Naritasan Institute for Buddhist Studies* (『成田山仏教研究所紀要』) 16, 91-147.
- Yoshimizu 1994 Ead., "On *rañ gi mtshan ñid kyis grub pa* III. Section II and III", *Journal of Naritasan Institute for Buddhist Studies* (『成田山仏教研究所紀要』) 17, 295-354.
- Yoshimizu 1996 Ead., *Die Erkenntnislehre des Prāsāngika-Madhyamaka nach dem Tshig gsal ston thun gyi tshad ma'i mam bśad des 'Jam dbyaṅs bzad pa'i rdo rje*, WSTB 37, Wien.
- Yoshimizu 1997 Ead., "Tsoñ khn pa on *don byed nus pa*", *Tibetan Studies, Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995*, Wien, vol. 2, 1103-1120.
- Yoshimizu (forthcoming) Ead., "*dr̥śya* and *vikalpya* or *snang ba* and *blags pa* associated in a conceptual cognition", *Proceedings of the 3rd International Dharmakīrti Conference, Hiroshima 1997* (in preparation).
- 藏漢大辭典 張怡荪主編『藏漢大辭典』民族出版社，1985.
- Zwilling 1981 Leonard Zwilling, "Sa skya Paṇḍita's Version of *Pramāṇavārttikam* III. 3 — A Case Study on the Influence of Exegesis upon Translation in Tibet", *Studies in Indian Philosophy—A Memorial Volume in Honor of Pandit Sukhlalji Sanghvi*, D. Malvania & N. J. Shah (eds.), L.D. Series 84, Ahmedabad, 305-313.